

熊野の
木林から



富里の川は、支流の安川を含めて透明度が高く、非常に美しい。こんな水質なら、河童も牛鬼もさぞかし暮らしやすいことだろう。

富里の川は、支流の安川を含めて透明度が高く、非常に美しい。こんな水質なら、河童も牛鬼もさぞかし暮らしやすいことだろう。

怪熊野

「旧・大塔村の怪異(其の二)」

其の(六)

和歌山大学
システム工学部
システム学科
環境システム
中島敦司教授



間を川に引き込み尻を抜くなどといわれる。また、人間の唾を嫌うらしく唾を吐きかけておくとそこには近づかない、相撲が好きで人をくすぐつてずる勝ちするともいう。



尾張藩士で書家の三好徳山(みよし しょうざん)が没年の嘉永3年(1850)に著した奇談珍話集「想山著聞奇集」の中に「魚染(えぞ)に髪(かみ)の毛(け)の生(な)る事(こと)として、山姥(やまばあ)の髪(かみ)の毛(け)のことが記載されている。(パブリックドメイン)

別の話では、一本足である、川原にクスの木が5本あればそこより上流には上がらない、馬の荷積みを邪魔するともいわれ、一本足の怪物ヒトツダラと同じだという人もいる。ヒトツダラは、那智山周辺に出るといわれる全国的にも有名な妖怪で、南方熊楠も民族学者の柳田國男も書に記している。那智山に伝わる話の中に「那智山のヒトツダラは大塔からやってくる」というものもあり、大塔とヒトツダラの関わりは興味深い。

その昔、安川の上流に今もある牛鬼(うしおに)滝のそばで10余人の人が山仕事のために小屋住みした際、深夜に遠くから猫のような声が聞こえてくる。声は次第に近づいてきて小屋の傍らを通り過ぎる時には、鐘を突くかのような地鳴りと

なった。声はほどなく遠くののだが、10余人は皆がおのを構え、あまりの恐怖のために夜が明けるまで誰ひとり言葉を出せなかったという。牛鬼滝の下では、3尺を超える長い髪の毛がたくさん固められて置かれていることがあるという。これは「山姥の休め木」ともいわれる絹皮病(キノコ)で枯れた木の皮がささくれた残骸や、熊楠も記した「山姥の髪の毛」ともいわれるウマノケダケなどキノコの菌糸束のことかも知れないが、滝の名が示すように牛鬼の仕業かも知れない。この辺りには、よほど牛鬼が出たのだろうか、牛鬼滝の近く、大塔山と野竹法師山の間には牛鬼峠があり、峠を越えた東の本宮側にも牛鬼の滝があり、また、いくつかの牛鬼の伝承も伝わる。その他の地区では、鮎川の奥の愛賀郷(合)でも牛鬼が出没したという伝承がある。

中島敦司(なかしま あつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師。12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)、NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

